ファントムクォーツ　仮面ライダーゴースト外伝　仮面ライダーｐｑ

鉄槻緋色

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大好きだった姉が行方不明になってから六年間、少女には探す手段も無く、それゆえ吹っ切ることもできず中途半端に気持ちを蝕まれながら過ごしていた。

ところがある日、街角で懐かしい姿を目撃する。

それは希望か、さらなる苦悶の幕開けか。

舞い降りた幽幻水晶（ファントムクォーツ）が少女の心を惑わせる。

年月の積層に閉ざされた思いはどこへ向かうのか。

止まったままの少女の時が、いま再び動き出す。

目次

第1話　暗転
1 …… 1
2 …… 7
3 …… 14

第2話　幻惑
1 …… 22
2 …… 27
3 …… 31

第1話　暗転

●　1　●

「「倉木（くらき・ゆう）　優」さん。……高校生か」

向かいのソファにふんぞり返った豊満な肢体の美女が、引き寄せた書類を目の高さにつまみ上げて読み上げた。

「中学生かと思ったわ」

それも、ひどくぞんざいな調子で。

「……よく言われまス」

優は制服のスカートの裾を握りしめ、歯の隙間から絞り出すようにしてそれだけを答える。

自分の寸胴とも言われた体と比べ、目の前の女性のスーツを押し上げるメリハリボディは目眩がするほど妬ましい。

いったい何を食えばこうなれるのか。できれば切り取って分けてほしいものである。

「だろうねえ。無意味な粗食に加えて運動不足じゃあガキの体から脱皮できないよお？　ご飯とか少ししか食べてないでしょ。わざわざ量を減らしてさ」

書類をおろした女性の顔は、片眉を上げて心底呆れたと言った形をしていた。

ウエーブのかかった艶のある髪型と言い、ひん曲がったルージュと言い、絶世の美人とも言える造作がその表情をすると、神経を逆撫でる威力もひとしおだ。

「太りたくないんです！」

だからつい反射的に声を荒げてしまった。

ところが、それに対しても女性は仰け反って仮借無く爆笑するだけだった。

「っはっは！　あるある！　その年頃は、そりゃあ摂取量を気にするもんさ！　だけどね、普通に食ってて太るのは、遺伝や体質を除けば、食っちゃ寝してた場合のハナシさね」

ケラケラを笑いながら、書類をテーブルに投げ出して続ける。
「優ちゃんさ、インドア趣味だろ？　スポーツをやれとまでは言わないからさ、ちゃあんと食べて、こまめに動くといいよ。休みの日だってどうせ閉じこもってばっかりなんだろう？　散歩しな散歩。登下校以外で。ちょっと歩くだけでもぜんぜん違うよ？」
「なっ……!?」
出会ってすぐの人間から「ちゃん付け」で呼ばれ、話してもいない趣味や日常の事まで看破され、優の顔色は青から赤へと忙しく入れ替わった。
そう言えば、最初の粗食だの運動不足だのも、いったい何を根拠に言い出したのか。
確かに、休日はほとんど外に出ないが。
「あっ、なん、その、」
「歩き方が歪んでる。どんだけ身体を使ってないのさ。見ただけで分かるよ」
女性は混乱する優にかまわず気配を収束させると、一変して真面目な調子で語り出した。
「体の動きが鈍ると、血の流れが滞る。血の巡りが悪くなると、身体のあちこちに異常が起こる。身体の異常は心の状態にも直結するから、考えもどんどん暗くなる。悪いほうへ考える。――運動しな運動。そうすりゃこんな、いなくなったお姉さんだなんて幻だって、見なくなるさ」
「……！」
指先で書類を叩く女性の言い種に、とうとう優は激発した。
「幻なんかじゃありません！　お姉ちゃんは生きてます！　そもそも」
床を蹴って立ち上がった優は、この建物の外、看板があったあたりに手を振って。
「そもそもここは探偵事務所で、ほかにも不思議な出来事でも話を聞いてくれるって聞きました！」
「いかにも。ウチは『大地探偵事務所』。アタシは所長にしてゴースト

ハンターの大地（だいち）・衣織（いおり）さね」
優の剣幕など無いもののごとく、目の前の女性――大地　衣織は淡々と言いながら、懐から取り出した名刺を指先から弾き飛ばした。
四角い名刺がくるくると回転しながらテーブルの上に落ちた。
「だったら！」
「だからさ。目撃情報の確度には鼻が利くんだよ。不健康な人間は見間違いを起こすし、幻覚だって見ることもある。幻覚に縁のない健康な人間が見たってんなら信じるに値するだろうけど」
そしてお前は健康か？　と方眉を上げた衣織の視線が問いかける。
たったいま不健康認定されたばかりの優は、言葉に詰まった。
「……」
優は立ったまま、衣織を睨み返しながら唇を噛むしかない。
そこで優は、この探偵事務所にもうひとり人がいるのに気付いた。
衣織やキャビネットなどに遮られていて今まで気付かなかったが、部屋の奥の椅子に腰掛けている奇妙な人物がいたのだ。
なにが奇妙かと言えば、サイズの合わないだぶだぶの真っ白なパーカーを着て、フードまで目深に被っているのだが、その顔に、お稲荷様のようなキツネ面を被っているのだ。
全体的に白装束なせいで、殊更不気味に見える。
回転する事務椅子に、体育座りのように腰掛けている。自分と変わらぬ程度の小柄で細身、露出した剥き出しの両脚などを見るに、おそらく女の子のようだった。
こちらを向いているようだが、特に気にした様子もない。キツネ面のせいで目線が合っているのかもわからない。
そいつは、ふと横を向いて、そこのデスクに置かれたグラスを取り上げると、ストローを口元につまみ上げた。
当然、ストローはお面にぶつかって、くわえることはできない。
そいつはしばらく試行錯誤したのち、キツネ面を少し持ち上げて、あごの隙間からストローを差し入れると、ややあってストローの中をオレンジ色の液体が上っていった。
ご満悦な様子で身体を揺すりながらジュースを飲むそいつに呆気

に取られたが、優はようやくそいつから視線を戻した。
「とにかく！　六年前にいなくなったお姉ちゃんが歩いてるのを、本当にこの前見たんです！　誰もわたしの言うことを信じてくれない！　もう、ここしか頼るところが無いんです！　お金なら、ありますから！」
「無駄金を払うことも無いさね」
優の剣幕にも、衣織はにべもない。
高く組んだ足の、ストッキングに覆われたつま先をぴこぴこと振って。
「帰りな。全力疾走でだ。家に着く頃にゃあそんな妄想なんざ綺麗に吹き飛んでいるさ」
「ひとでなし！」
怒りのままに床を蹴りつけた優は、身を翻して事務所から飛び出していった。
ばぁん、と激しい音を立ててドアが閉ざされ、続いて忙しい足音が急速に遠ざかってゆく。
概ね衣織の思惑通り、駆け足で帰っていったようだ。
「……あきらちゃんの事だったりしてな」
衣織がソファにふんぞり返ったまま、首を巡らせてキツネ面の少女を見遣る。
言われたキツネ面の少女は、ストローをくわえたまま可愛いらしく小首を傾げた。
「かもねー。わかんないけどー」
あっけらかん、といった調子の幼い声音でキツネ面の少女――あきらが応えた。
応えながらあきらは、体を傾けて左手を床に伸ばす。そこに寝そべっていた体毛の長い大型犬――優のいた所からは、死角になって見えていなかった――の背中をわしわしと撫でた。
どっこいしょ、と美女にあるまじき声をかけながら衣織が再び優が書いた書類をつまみ上げる。
「倉木（くらき・あきな）　明奈。……惜しいな。一文字違いか。　聞き覚えある？」

「ないよー」
　あきらは犬を撫でる手も止めず、ろくに考えもせずに首を振って即答する。
「しっかし。依頼者のトコに写真が残ってないってのは、痛いねえ。あれば一発なのにさあ」
「あれー？　あの子、写真無いって言ったっけ？」
　がしがしと頭を掻いて呻く衣織に、あきらが上体を起こして問いかけた。
「あんだけ必死なのに、写真を持参しないって事は、残ってないって事さ。それも、今時データで残せるはずのものも無いって事は、絶望した両親がわざわざ処分したか、火事か何かで消失したか。そりゃあどこに行っても断られるはずだよ。　――面倒だねえ」
「直接会うのは、ダメなんだよね？」
　あきらに向かって衣織が後ろ姿のまま手を振る。
「万が一ビンゴだったら、アタシが逮捕されちまうよ。勘弁してくれ。何度も言ってるだろう？」
「そっかー」
「だけどまあ、今回は最良のおもしろいヒントがある」
　立ち上がった衣織が、書類をひらひらさせながら、あきらの元へと歩いてくる。
「なにー？」
「優ちゃんが最近見かけたって言う「お姉ちゃん」さ。六年前で十七歳。生きてりゃ現在二十三歳に成長しているはずの人物を、違和感無くその人だと認識できるのは、それなりに異常さね。――調べる必要がある」
　突き出された書類越しに、キツネ面が衣織を見上げた。小首を傾げて。
「……じゃあ、どうして衣織は意地悪なこと言ってあの子を帰らせたの？　普通に引き受ければいいじゃん」
「あのドンクサそうな優ちゃんが、大金を持っているワケないじゃないのさ。親も連れずに来たって事は、両親に内緒で来たんだろう？

普通に引き受けたって、たいした金になりゃしないよ」
衣織は書類をぱたぱたと振って大仰に肩をすくめる。
「だったら、情報だけありがたくいただいて、依頼人っていう邪魔者ナシであきらちゃんのためだけに有効に使うのが上策ってもんさね」
言いながら背を向けて、元の応接用のソファへ歩いてゆく衣織を眺め、あきらは口元を押さえて肩を振るわせた。
くすくすと笑い声が漏れ出ている。
「ちょいと。なに笑ってんのさ」
若干不機嫌に言うが、衣織はこちらを向こうとしない。
「ううん。　衣織は、やさしいねえ。　ねえダーリン？」
呼びかけられた犬は、耳を揺らして反応するのみで、顔を上げもしなかったが。
「は！　言ってる意味が分かんないよ！」
両腕を振って衣織が声を荒げるが、あきらの含み笑いは止まらなかった。

●　2　●

「もう！　なんなのあのオバサン！　ムカつく！」
どかどかとアスファルトを蹴り付け、憤懣遣る方無い様子の優が、夕暮れの町を歩いてゆく。
通り過ぎた通行人たちの幾人かが驚いた顔で仰け反ってゆく勢いで。
「本当に見たのに！　お姉ちゃん、あの時……」
やがて足速を落とした優は立ち止まり、車通りもまばらな交差点の、これから行こうとしていた方向とは別の方角の道路の先を見遣った。
一ヶ月ほど前のことだ。
趣味の手芸(忌々しいことに、あのオバサンの指摘は図星だった)の材料を買いに行く途中、反対側の歩道を歩く姉の姿を偶然見かけたのだ。
その時、優は自転車に乗っていた。慌てて離れた信号を回って後を追ったのだが、見つけた地点に着いた時にはもうどこを見回しても姉の姿はなかった。
決して見間違いではない。そこには自信がある。目前の車道を行き交う自動車を避けるために横断歩道を探す程度の冷静さもあった。
家族をひとり失い、写真も前の家も火事で無くし、父も母もそれなりに病みもしたが、今は普通に生活を送れるほどには心の整理もつけられたつもりだ。
それを、あのオバサンは、心無い言葉で煙に巻き貶めたのだ。
「許せない……！」
再び怒りが沸き上がる。
もう一度、せめて何らかの手がかりを求めて、あの時の姉を見つけた場所まで行ってみようかと考えたが、それはできないと優は頭を振った。
時はすでに日暮れ。
父も母も、唯一残された娘であるところの自分を、神経質なほど大

切にしている。
自分も、自分がいなくなる事で両親をこれ以上悲しませたくないと思っている。姉といた楽しい思い出のある家族に、これ以上の傷があってはならない。
絶対に、万が一を起こしてはならないのだ。
「帰ろう」
そのように考え、判断できる程度には冷静なのだ。
――だから、あのオバサンは間違っている。
「なにがゴーストハンターよ。逆に断られて良かった。胡散臭いったらありゃしない」
見つめていた方角の道路に背を向けて歩き出した優だが、あ、と呻いて数歩と経たずに立ち止まった。
「……あー。一応、報告には行かないといけないかなあ」
あの『大地探偵事務所』は優が見つけたものではなく、知人に紹介されて知ったものだった。
優の境遇を知って気を遣ってもらったのだから、お礼と事後報告には行かねばなるまい。
お礼に伺うのは、まったくやぶさかではない。やぶさかではないのだが。
「……仕方ない。行くか」
優はそちらへ足を向けた。
そこは、どこか古ぼけた印象の喫茶店だった。
煉瓦で組み上げられた外装や、所々に配置されたステンドグラスの装飾が、神秘的でクラシックな雰囲気を醸し出している。
正直、この商店街の直中にあっては、周囲の日本風家屋からは非常に浮きまくっている。
だけど、中では落ち着いてくつろぐことのできる、優のお気に入りの店ではあった。
「あ。いらっしゃい」
ドアに揺らされたベルが趣のある音色を奏でる。
「どうぞ。　いつもの席、空いてますよ」

「どうも」
カウンターの向こうでコーヒーミルのハンドルを回していた壮年の男性が、眼鏡越しの柔和な笑顔で出迎えた。
看板に「Ｂｌｉｎｄ　Ｈｅａｒｔ」と控えめに刻まれたこの喫茶店に足繁く通ううちに、店の主人に顔を覚えられ、気に入りの席までできてしまったのだった。
いそいそと、いつものカウンターの席につく。
「いつものでいいのかな？」
「あ、はい、お願いします」
そして、カフェオレ、と言うまでもなくお気に入りのメニューが出てきてしまうまでにもなった。
決してコミュニケーションの得意なほうでない優としては恐縮しきりだが、実に居心地の良い店なのである。
――ただ一点を除いては。
「お待たせしたな！　ユウ！」
明朗で溌剌とした、そしてやけに尊大な声が優の傍らへやってきた。
「所望のカフェオレだ！　今日のコウジも実に良い仕事をしている！　味わって飲むが良いぞ！」
そう言って優の前にソーサーに載せられたコーヒーカップを置いたのは、長身で、眉目が非常に整った青年だった。
「ああ！　しかし、いつもいつも良い香りだ！　なあコウジ！　私にも同じものをくれないか！」
「遊馬君はまだ仕事中でしょ？」
「休憩だ！」
「さっき休んだばかりでしょう？」
「もう一度休憩だ！」
「休憩は、もうおしまいだよ？」
「ダメかー！　はっはっは！」
勝手に優の隣の椅子に腰掛けた青年――榊（さかき）・遊馬（あすま）は、店の主人の榊（さかき）・弘司（こうじ）の従兄弟だそうで、住み込みで働いているのだそうだ。

――なのだが。
光輝くサラサラな栗色の髪と言い、活力に溢れた眼光と言い、根拠の無い尊大さと言い、意味不明の気品と言い、どこのお貴族さまが外遊に来たのかという、出所不明な振る舞いが不思議な青年だった。
「浮き世離れ」という言葉では済まない言動ばかりだが、それが嘘とも思えないほど馴染んでいるため、優としても黙って受け入れざるを得ない。
一度、弘司にこっそりと訊ねたことがあるのだが、「実家がお金持ちらしい」以上の話は聞けなかったし、それ以上追求できる立場でもない。
それはともかくとしても。
優としては、お店の雰囲気は素敵で大好きなのに、それをブチ壊しにしてしまう遊馬のキャラが苦手だった。
それが、気に入りの店に足を運ぶのを躊躇する理由だった。
遊馬自身は至って底抜けに明るいだけの、優にとっては少々ウザいだけの、根は良い人である。
先ほどから隣でずっと、曇りのない純真無垢な底抜けの笑顔でこちらを見つめている遊馬を半眼に見つつ、カフェオレをひとくち飲み込んだ。
「……あの、マスター。教えてもらった『大地探偵事務所』に行ってきました」
「ほう！　で、どうだった！」
「遊馬さんには言ってないでしょ！」
興味津々に目を輝かせて聞き返してきた遊馬に思わず怒鳴りつけてしまう。
カウンターの向こうにいる弘司に聞こえていないわけがないし、仕事の手を止めさせてしまうわけにもいかないので、優はそのまま続ける。
「……行ってきたんですけど、断られました」
紹介してくれた人に対して悪しざまに言わないだけの常識は心得ていたから、結果だけを言った。

「ありゃ。ダメだったか。ごめんね、お役に立てなくて」
「いいえ。ありがとうございました」
詫びる弘司に、優も慌てて頭を下げた。
「しかし、行方不明者の捜索の依頼で、肉親の目撃情報もあるのに、なにがいけなかったんだろうねえ？」
「それが、ひどいんですよあの探偵事務所！」
だが、弘司の訝しむ疑問に、つい優の中の不満が弾けてしまった。
「わたしの見間違いだろうって、決めつけるんですよあそこの所長！
不健康だから、幻覚でも見たんだろう、って！　ひどくないですか！」
「えぇー、そんなこと言ったのかい？」
抽出器具を操作しながら、弘司がおおげさに眉をしかめた。
「ふん、存外使えぬ輩だな！」
珍しく黙っていた遊馬が、いきなり立ち上がって憤りの声をあげた。
「傷心の子供の助けを求める声すら聞けないとは、とんだ非道がいたものだ！」
「子供とか言わないで」
「ユウ。おまえの胸の痛み、良く分かるぞ」
優の抗弁をさらっと無視して遊馬は、沈痛な面もちでまぶたを閉じると、ゆるく握った右の拳で、自身の胸元にささっと楕円を描いた。
それはまるで、聖印のように自然な動作で。
「このカフェオレは私の奢りだ。心置きなくこの味と温もりで心身を癒すが良い！」
「……」
普段は頓珍漢な物言いしかしない遊馬だが、こればかりはいつものように跳ね除けることができなかった。
なぜなら、遊馬も、数年前に妹を亡くしていたのだから。いつだったか、優の姉についてここで話した時に、遊馬が言葉少なに語ってくれたことがあった。
だから。

「……うん。ありがとう」
優は、ありがたく、その温もりを味わった。
店を出た優を道路まで出て見送った弘司は、「ｃｌｏｓｅｄ」の札を提げてそのドアを閉じた。
眼鏡を怜悧に光らせて、店内を振り向く。
「……あの探偵事務所の「ゴーストハンター」の看板に偽りがなければ、今夜、いや、すぐにでも動くだろうね」
「なんの話だ？　コウジ」
「遊馬君のハナシをしているつもりだったんだけどねえ！」
きょとん、と笑顔で問い返してきた遊馬に、弘司が伸び上がって素っ頓狂な声をあげた。
「遊馬君の縁者が絡んでるかもしれないんだろう？　近頃この町で起きている怪事件の中では、これは一番の好機だよ。行くのなら、今すぐ行ったほうがいい」
「しかし、ユウを利用する形になるのは、いささか気が咎めるな」
腕組みしてスツールに腰掛ける遊馬は、眉をしかめた。
「ことに、ほぼ同じ傷を抱える者としては」
「僕も、「好機だ」と言っただけだよ」
弘司は、なだめるように手を振ってのそのそとカウンターに戻った。
「だから、君が決めなさい。この機を利用しないのなら、せめて優君に警告して、お姉さん探しを止めさせなくてはならない。このまま放っておくと、恐らくは怪事件に巻き込まれることになる」
「……そうだな」
呻くと、遊馬は懐から紡錘形の携帯電話のようなものを取り出した。
それは、ディスプレイ部が横回転して展開する「リボルバー式」と呼ばれる、現代日本にあっては過去の遺物とも呼べる代物……によく似ていた。
機械と言うには、やや生物的な意匠が目立つ奇妙な物体だったが。
遊馬はしばし、取り出したそれを見つめていた。

「おや。降ってきたか」
いつの間にか、薄暗い窓の外にはいくつかの雨筋と、持ち物を頭上にかざして走る人々の姿があった。
「ちょうど良い口実ができたよ。ほら、これを持っていってあげるといい。どうするかは、道々考えればいいよ」
カウンターの裏から取り出した傘を突き出す弘司に、遊馬は意を決したように眉目を引き締めると、それを受け取って立ち上がった。
「うむ！　行ってくる！」

●　3　●

姉は、雨が好きだった。
傘をくるくる回して、心底楽しそうに踊ってたりもした。
見ているこっちまで楽しくなりそうな笑顔で。
別に晴れが嫌いということでは決してないし、いかなる天候であろうと、楽しんでしまう人だった。
特に、優が憂鬱になる雨でさえ楽しんでしまうから、こと印象に残ったのだろう。
「……」
だから、雨は特に姉を想起させる。
優にとっては、姉との楽しかった思い出と、いなくなった現実を同時に思い出させる、複雑な天候だ。
「……あーあ」
突然降り出した雨に慌てて飛び込んだ、シャッターをおろした空きテナントのテントの下で、優は思わずため息をこぼした。
カフェオレは温かかったが、これではまたすぐに冷めてしまう。心が。
（やっぱり、見間違いだったのかなあ）
気持ちを憂鬱にさせてしまう雨の中では、簡単に不安に傾いてしまう。
鼻の奥に鈍い感覚が沸き上がる。涙が溢れる予兆。
いつもなら、このまま泣き暮れてしまうのだが、今日だけは違った。
「不健康な人間は、見間違いを起こす！」
「ざっけんなっっ!!」
脳裏に閃いたあのオバサンの声を、気合いで吹き飛ばした。
普段は人目を気にして、外で大声を出すなどまずやらないことだが、今だけは気にならなかった。雨の中、通行人などそもそもいないが。
「いや、自分でも目を疑ったもん！　でも、良く見た上で、そっくりだったもん！」

両手の指先でこめかみを押さえ、必死に記憶を思い起こす。
あの時、向かいの道路を歩く姉は、青いパーカーを着ていた。
活動的な姉は、動きやすい服装を好んで着ていた。ショートパンツにサイハイソックスなど、着衣の組み合わせも当時のままだった。
そう、ちょうどあんな感じで……。
「……え？」
記憶をたぐる空想の姉の姿が、現実にだぶったような気がした。
土砂降りの雨の中、道路の向かいに立つ青い人影が、優のイメージに酷似していたのだ。
さすがに、すぐに見間違いを疑った。こんな所で、真っ向から出会えるなどとは思っていない。
でも。
青のパーカー。両手はポケットに突っ込んでおり、フードを目深に被っている。
ショートパンツから伸びた白磁のような両脚は、サイハイソックスに包まれている。
そんな女の子が、道路の向かいの路地に突っ立っているのだ。
この土砂降りの雨の中で。
（……え？）
まさか。本当に、そんなことがあるのだろうか。
向こうの路地に立つパーカーの少女は、いま、フードに両手を遣り、ゆっくりと背後に脱ぎおろして頭を露出させた。
（……うそ……）
現れたのは、艶やかな黒髪。
セミショートのストレート。前髪が真っ直ぐに切り揃えられている。
その下の、好奇心いっぱいのまん丸な瞳が、優を真っ直ぐに見つめていた。
「……お、ねえ、ちゃ……」
優の顔を、無数の雨粒が叩いてずぶ濡れにする。
優は、我知らずテントの下からふらふらと歩み出ていた。

「おねえちゃん、なの……？」
だが、その歩みは、ガードレールによって阻まれる。
自動車の音はしない。
優は、もたもたとガードレールを乗り越えようとした。
視線を外してしまったら姉の姿が消えてしまうと思って、ろくに足下も見ない。
「おねえちゃん、……お姉ちゃん！」
ようやくガードレールをまたぎ越した優は、駆け出した。
写真を失い、夢でしか見れなかった姉の姿だ。何度も繰り返し見たそのイメージは、我ながら鮮明だ。絶対に見間違いではない。
「お姉ちゃん！　お姉ちゃんっ！」
だけど、おかしい。
姉は、あんな。
あ　ん　な　嫌　な　笑　い　方　を　し　た　だ　ろ　う　か。
向かいの路地に立つ姉は、片手を真っ直ぐ突き出すと、その指先を、楕円を描くように動かした。
（……え？）
その動作に、既視感を抱くと同時、優の体が突然軽くなったように感じた。
（え？　あれ？）
雨粒の当たる冷たい感触も、いつの間にか無い。
重たい体を置いて、まるで意識だけで姉の元へ飛翔するかのようだった。
でも、構わない。
あれほど思い焦がれていた姉の、その胸に飛び込みたいと、どれほど願ったことか。
それが、いま叶
土砂降りの中、遊馬はその手の傘をささずに握りしめたまま走り続けていた。
遊馬は、雨に濡れることが大好きなのだ。

ずぶ濡れで帰っては、弘司にしこたま怒られるのだが。
そして、濡れっぱなしでは体に変調をきたすことも知っている。
だから、優に早く傘を届けてやらねばと思っている。
その為の全力疾走だったが。
「……、ユウ！」
無人の路上に、優が倒れているのを発見した遊馬は慌てて駆け寄り、膝をついて優の様子を検分する。
「おい！　ユウ！　こんな所で寝ていては、具合が悪くなるぞ！　頭が痛くなったり、ぼんやりと熱くなったり寒くなったり平衡が取れなくなったりするぞ！　ユウ！」
そして、肩を揺すろうと触れた時、その違和感に気付いた。
「――魂が、ない……？」
どかした前髪の下の目が、開いたままだった。
「……なん、て、ことだ……！」
ぎり、と噛みしめた歯がきしんだ音を立てた。
だが、魂が抜けただけならまだ手立ては残っている。
遊馬は優の身体を担ぎ上げた。
とにかく、とりあえずはこの身体を弘司の元へ運ばねば――。
振り返ったそこの路上に、異形の姿を見て遊馬は身動きを止めた。
「やはり、ウチの手の者か！」
呻くと、遊馬はそばの家屋に駆け寄り、雨のかからぬ位置に優の体を横たえた。
そして素早く立ち上がり、異形に向き直る。
そいつ自体に見覚えはない。
だが、遊馬の知るものに関係しているのは明白だ。
そいつは、大まかには「蜘蛛」に似ていた。ただし、全高・全幅ともに人よりも大きい。
それは「ひと一人ほどの物体を、包帯で簀巻きにしたようなもの」を胴体に、両側から四対の節くれ立った脚を生やした形状をしていた。
包帯の簀巻きの、頭部にあたる位置の包帯の隙間から、ひとつだけ目玉がのぞき、それがこちらを見つめているのだ。

「おのれ……！」
遊馬は、懐から紡錘形の携帯電話のような器具を取り出すと、ディスプレイ部を展開させて身構えた。
それを、まるでナイフのようにひと振りすると、ディスプレイパネルが発光し、わずかに伸張した。
握る本体を柄、ディスプレイ部を刃とする、さながら短剣のように構えると、遊馬はそれで蜘蛛型の異形に飛びかかった。
発光する刃で、異形の脚を殴りつける。
盛大に火花を散らせ、異形はわずかに後退した。
「こいつを放った施術者が近くにいるはずだ！　どこだ！」
周囲に目配せをしながら、蜘蛛型の異形の側面に回り込む。
蜘蛛型の異形は、頭部の目玉をぎょろつかせると、遊馬に向き直り、脚を一本振り上げた。
襲いかかる捻くれた爪を、輝く短剣で打ち払う。
その威力は重く、遊馬はその爪を逸らして身を翻して躱した。
剣戟を繰り返し、異形の死角へ死角へと回り込み続ける。
「どこだ……！」
数度の爪の刺突を打ち捌きながら辺りを見回す遊馬は、路地の陰にようやく人影を見つけた。
「貴様か！　あ……？」
だが、それを見た遊馬の意識は空転してしまった。
目撃したものの、あまりの有り得なさに。
「……な、に……」
そこにいたのは、青のパーカーを纏った少女だった。
セミショートのストレート。前髪が真っ直ぐに切り揃えられている。
その下の、好奇心いっぱいのまん丸な瞳が、遊馬を真っ直ぐに見つめていた。
いたずらめいた笑みを浮かべて。
「……アクイラ……？」
呆然と、その彼女の名前を呟いた。

だが、感じた懸念ごと遊馬は激しく殴り飛ばされた。
「っぐっ……！」
凄まじい勢いで道路を飛び越え、向かいの建物のシャッターをへこませるほど激突した。
「がっ」
歩道に倒れ込んだ遊馬は、衝撃に朦朧とし、全身を襲う激痛で起きあがることもできない。
――なぜ妹がそこにいる？　異形を使役しているのは妹か？　なぜ妹がそんなことをする？　まだ異形は健在か？　優を救わねばならないのに私は――！
様々な思考が脳裏を渦巻くが、視界は火花を散らし、痺れる体は言うことをきかない。
八本の脚をわしゃわしゃと動かし、蜘蛛型の異形が動けぬ遊馬に迫る――。

始めは、すぐにでも仕掛けるつもりだった。
あきらが辿り着いた時には既に優の肉体は倒れ伏しており、そこに蜘蛛型の異形がいた。
ところが、そこに駆け込んできた見知らぬ男が異形に立ち向かったのを見て、様子を伺っていたのだ。
異形はともかく、男が自分の敵に回らないとも限らない。だから、形勢がどちらかに傾くまで待つことにした。
そして早々と決着がついた。だからあきらは動き出した。
「やるよー、ダーリン！」
座り込んでいた屋根の上で立ち上がり、雨にも構わずさしていた赤い傘をたたんで、傍らに控える毛の長い大型犬に呼びかける。
犬――ダーリンは、目を閉じたまま。
だが、素早く立ち上がると、その姿を揺らめかせ、形を変えてゆく。
現れたのは、人ほどの全長の異形の蛇。
まるで骨と肉とをかけ合わせたかのような表皮を持ち、頭部は露出した頭蓋骨に酷似している。

ただし、時折り先が割れた舌を覗かせるなど生物的な器官を内部に持ちながらも、その眼窩は空洞で、眼球にあたる器官が見あたらない。
だがそいつ――変貌したダーリンは、身をくねらせると宙を泳ぐように飛翔して、まるで見えているかのようにあきらの側を周回する。
ダーリンはあきらの身体に螺旋状に巻き付くと、腰のあたりで一回転して、さらに形状を変化させた。
やがてあきら腹のあたりに現れたのは、先ほどのダーリンの身体を模した、幅広のベルト。
バックルにあたる部分には、頭蓋のような頭部がある。
ベルトとなったダーリンをぽんぽんと叩くと、あきらは翻した片手に球状の物体を取り出した。
白い球の、表面に一カ所、黒い丸が描かれているそれは、まるで目玉。
ところどころに従来の眼球には無い凹凸を備えたその球体をかざし、あきらはひとこと呟いた。
「――変身」
そしてその目玉を、ベルトバックルの眼窩にはめ込む。
続いて、手のひらをなでるようにバックルの目玉の前を通過させると、ベルトの瞳の中から一条の白い影が飛び出してきた。
宙で踊るように翻ったそれは、一着の白のパーカー。
まるで意志あるもののごとく飛翔して、あきらの周囲を旋回すると、自らあきらの背後から身体にかぶさった。
あきらも両腕を上げて袖を通しそのパーカーを着込む。普段着のパーカーと二重になってしまうが、構う様子はない。
すると、パーカーの内側から黒の霞が噴き出し、瞬く間に胴を、腕を脚を、あきらの顔のキツネ面ごと全身くまなく覆い尽くしてしまった。
やがて霞が晴れると、後にあらわれたのは、漆黒のボディスーツ。
顔面まで黒で覆い、全身の、右側にはアルファベットの「p」、左側には「q」のような輝く文様を各所にあしらった、あきらの体躯に沿った形状のボディスーツだった。

パーカーの、フードに覆われた頭部の顔面は黒の無貌のままだったが、フードの両側面に、瞳を赤いラインで衣装化した文様が現れた。
その瞳の文様が、まるで本来の目であるかのようにまばたきすると、その変化は完了したようだった。
フードに瞳を描いた純白のパーカーを着込んだ、漆黒のボディスーツ姿。
「はい。ダーリン」
あきらは、片手に持ちっぱなしだった赤い傘を横にして、ベルトバックルに近づけた。
すると、バックルの下端部の牙の列が上下に別れ、顎を開くとその傘に噛みついた。
噛みつかれた傘は、姿をぼやかせると、やや太さを増し、どこか生物的な意匠を加えた頑丈そうな形状に変化した。
あきらは変化した傘をひと振りすると、まるで階段から一歩降りるような軽い動作で屋根から地上へと飛び降りていった。

第2話　幻惑

●　1　●

『不可解な遺体発見される』と表題に大きく書かれた新聞紙をテーブルに放り投げ、衣織はソファに身を投げ出した。

テーブルの上には既に、新聞や書類が山と積まれている。

新たに投げ込まれた新聞紙は、それらの書類を押し崩し、もろとも巻き込んで傾れ落ちてしまう。

だが衣織はいっさい構わず、さらにそのテーブルの上に足を投げ出して載せると、ソファの背もたれに仰け反って事務所の天井を見上げた。

（無傷の遺体が、また発見された――）

記事の内容を反芻する。

それは、今日の朝刊の内容だった。

『当該施設の中で発見された三名の遺体には特に外傷もなく――』

『毒物は検出されず。治療中の病気・ケガも無く、それまでの病歴も持病も無いのに、突然全員同時に死亡したとしか思えない――』

（――まるで、ある時いきなり魂でも抜かれたかのような突然死）

胸中で、共通するその文末を繰り返す。

ここ半年ほど、似たような事件が幾度も起きていた。

新聞・報道などで謳われているその犠牲者の数は、衣織が数えたところでは、この半年で十数人ほど。

（だが、実態はそれどころじゃない。事の始まりを遡れば数年間、警察や報道が掴みきれていない分を含めれば、三倍以上――！）

数年がかりで、同じ死因で五十人以上が亡くなっている、と衣織は踏んでいる。

そこに行方不明者をすべて加えれば、合計は百にも届くだろう。

全てこの町を中心としたこの地方一帯で起こっている事である。

巧妙に条件をばらけさせて目立たなくされてあるが、仮にひとつの事件として見れば異常事態と言える。

そして、それらにはきっと、あきらに深く関わりのあるものが絡んでいる。
衣織とあきらは、この数年間「それ」を追い続けていた。
先ほど優がもたらした情報は、中でも当たりに近い部類だった。
「生存が見込めない行方不明者の目撃情報」などと言う、一見有り得ないオカルトじみた話は、いかにもあきらに関わりが深そうだ。
（優ちゃんには悪いけどねえ）
「行方不明者の捜索」程度の依頼なら、他にもいくらもあったのだ。この地方だけで同様の事件がこれほど起きている。優の家庭の事情だけが特別なのではない。
（――そして今のアタシにゃあ、あきらの事だけが一番大事なんだよ――）
衣織は頭痛をこらえるように眉をしかめてまぶたを閉じた。

――やめてやめてやめてやめてやめて――！
暗闇の中で優は絶叫を繰り返していた。
念願の姉と再会できたと思ったその前後の脈絡が、まったく思い出せない。
気がついた時には優の意識はその闇の中に浮かんでいた。
意識には靄がかかったようで、その光景の主観である自覚がありながら、主体の実感が無い。
状況を正しく把握できてはいない。
意のままにならない悪夢を見ているようだった。
そうだ。これは悪夢だ。
遊馬が光の刃をかざして優に襲いかかってくるなど。
そしてそれを、自らの腕で殴り飛ばしてしまったようだった。
遠くの壁に激突して崩折れた遊馬に、視界はゆっくりと迫ってゆく。
何もかも優の意志を無視して。
それが最悪の結末に至る景色であることが分かるのに、どんなに身悶えしても進行方向を変えることができない。

悪夢の光景を、一方的に見せられ続けるしかないのだ。
――やめてやめてやめて誰かたすけて――！
闇が泥濘のようにへばりつく意識の中で、ただただ絶叫を繰り返す。
遊馬に酷い事をしたくない。だが、身体は言うことを聞かない。
このままでは、遊馬を殺してしまう。
――そんなのはイヤだ――！
叫んだその時、真上から何者かが飛び降り、遊馬の前に割り込んできた。
そいつは白いパーカーを羽織っており、顔は目深に被ったフードの陰で見えないが、フードの側面に描かれた瞳の模様が代わりのようにこちらを睨み据えている。
――これを止めて！　やめさせて！
それが何なのかと訝しむ発想も浮かばない。
優はただひたすら助けを願った。
ところがそいつは。
手に持っていた赤い棒を剣のように振りかざして、優に襲いかかってきたのだ。
――やめ――！
底冷えのする恐怖が爆発的に広がり、あっと言う間に優の意識を塗り潰してしまった。

あきらは、変質させた赤い傘――パラソルスパイクを剣のように構え、蜘蛛型の異形――アラクネの手前の歩脚を立て続けに殴りつけ、倒れた男から離れる方向へと押し遣ってゆく。
無人の道路の真ん中で、無貌の剣士と異形の怪物が絡みつくようにして激しく位置を入れ替える。
凄まじい剣戟が土砂降りの雨を引き裂き、複数の脚に蹴散らされた水が二者の周りで弾け飛ぶ。
雪崩のように次々と襲いかかる爪を、あきらは素早くかいくぐり、アラクネの側面へ回り込んだ。

すれ違いざまにアラクネの脚を片端から殴りつけ、僅かに揺らいだアラクネの後方から飛びかかる。
ところが、アラクネの胴体にあたる包帯の簀巻きのような部位だけが素早く後ろを向き、赤い一つ目の下あたりから白い糸筋を吹き出してきた。
『っ!?』
宙にあったあきらでは躱す術はない。
あきらはパラソルスパイクの傘生地を正面に展開し、赤の天幕でそれを受け止めた。
着弾の衝撃を利用して後方に跳び退き着地する。
その間にアラクネは地に脚を突き体勢を立て直してしまった。
『……こないだのより堅いや』
閉じたパラソルスパイクを左手に持ち変え、空いた右手を開いたり閉じたりしながら呻く。
先ほどの交錯でアラクネの歩脚を殴りつけた際に、その強度を測っていたのだ。
『だけど体勢は崩せる。なんとかならなくもないかな』
アラクネの包帯の簀巻きのような頭部が再び蠢く。再三見たそれは、糸筋を吹き出す予備動作だ。
『えいっ』
あきらは展開したパラソルスパイクを前に放り投げた。
アラクネが射出した糸筋は、その赤い天幕に阻まれて四散する。
その隙に後退したあきらは白いパーカーから腕を引き抜くと、脱いだパーカーを裏返して素早く羽織り直した。
現れたパーカーの裏面は鮮やかなミントグリーン。目深に被ったフードには、やはり意匠化した瞳が描かれている。
『「グリーンファントム」！　支えてねダーリン！』
ベルトのバックルの頭をぽんと叩くと、あきらは未だ宙にあった開きっぱなしのパラソルスパイクに飛びついた。
左手で軸の付け根、右手でグリップを掴み、引き離す方向に力を込める。

するとパラソルスパイクが、天幕と軸とで分離した。
改めてあきらが左右に構えたそれは、さながら円形の盾と細身の剣。
先ほどまでの踵を浮かせた軽快な立ち回りを意識した体勢とは異なり、パーカーを裏返したあきらは地に足をしっかりと付け、重心を低く、安定を意識した体勢を取っていた。
盾を前にかざして半身に構え、剣の切っ先を蠍の尾針のようにアラクネに突きつける。
『いくよっ』
気勢を上げたあきらが、雨を蹴散らして突撃していった。

●　2　●

「……くっ」
朦朧とする頭をおさえて、遊馬はどうにか起きあがった。
「いったい何が……？」
本来ならとっくに異形の餌食になっていてもおかしくないところである。
見れば、何者かが蜘蛛型の異形の前に立ちはだかり、道路の真ん中で戦っている。
「……アクィラ？」
霞む視界に見覚えを感じてその名を呟くが、すぐに頭を振ってその発想を打ち消す。
目をこすって見直せば、剣と盾を構えたそのミントグリーンの人影は妹とは似ても似つかない。
それに気付いた遊馬は慌てて周囲を見回した。そうだ。先刻まさに妹の姿を見たではないか。
だが、見渡せる範囲には妹の姿はなかった。
「見間違いか……いや」
意識が鮮明になるにつれ、懸案事項を次々と思い出す。
何者かは知らないが、あのグリーンの人影は蜘蛛型の異形と渡り合っている。
今のうちに戦えない者――妹と優を安全圏に逃がさなければ。
改めて周囲を見回すが、妹の姿はやはり見当たらない。
（まずは、動くことのできぬ優の身体からだ）
誰かがいたのだとしても、早急に逃げてくれたと思いたい。
遊馬は、道路を挟んだ向かいの歩道、張り出した屋根の下に横たえた優の元へと駆け出した。
蜘蛛型の異形に目を付けられぬよう、戦いの現場を大きく迂回して雨に煙る道路を渡ってゆく。
――しかし――
走りながら遊馬は、蜘蛛型の異形の爪を円形の盾で打ち払うグリー

ンのパーカーの後ろ姿を横目に見ながら思案する。
（私は、なぜあれを妹だと見間違えたのか――？）

怒濤の勢いで次々と繰り出される爪の刺突を、あきらは盾で受け止め、逸らし、捌き続ける。
自らの特性を変更した今のあきらは、アラクネの攻撃を盾越しに受け止めてもびくともしない。
ただ、攻撃に転じずに受け止め続けているのには理由があった。
（あれ邪魔だなー）
フードの両側頭部に刻まれた瞳の文様は、ただの模様ではなくあらゆる波長を高精細に捉えるセンサーアイである。
両サイドに広範囲に渡って見通すことができ、今も正面からの攻撃を見切りながら、後方を通り過ぎてゆく男の姿も捉えていた。
――もしかしたら、あの男が背後からこちらを攻撃してくるかもしれない――
そう警戒して気にしていたのだが、どうもその様子はなさそうだ。
恐らく、歩道に倒れている少女の元へ行くのだろう、男がその歩道に到達したところであきらは反撃に出ることにした。
『えいっ』
振り下ろしてきた歩脚を、斜めに構えた盾に滑らせて一歩踏み込む。
つんのめったアラクネの腹の下に潜り込む勢いで上体を伸ばし、剣先で体重を支えていた後脚の一本を打ち払う。
『ーーーーッ!?』
アラクネの怪訝な苦鳴と同時にその体勢が大きく傾いた。それも、横に倒れかねない勢いで。
『そんで、そこっ』
転倒しかけたアラクネが咄嗟に地面に突き立てた前脚に向かって、手首の返しで閃いた刀身が突き刺さる。
『ーーーーーーーーッッ!?』
全体重をかけたその脚は、衝撃を逃がすことができない。

結果打ち砕かれた歩脚の爪が、雨粒を弾きながらきりきりと宙を舞った。
即座に身を翻したあきらはアラクネの側面へと回り込み、さらに歩脚を二本斬り飛ばした。
『ーーーーッッ!?』
『よしっ』
混乱したアラクネが身体を支えきれず完全に転倒したところで、あきらは大きく跳び退いた。
剣と盾を組み合わせ、パラソルスパイクをたたんでどこへともなく収納すると、パーカーを脱ぎ捨て再び裏返して羽織り直す。
白面を表にした最初の姿になったところで大きく跳躍し、そこの電柱の上に飛び乗った。
『「ホワイトファントム」！　抱き締めてよダーリン！』
叫び、あきらはベルトバックルの瞳の部分に片手を乗せて、その目を覆い隠すようにした。
そうしてふた呼吸ほど。
ベルトを覆う掌の隙間から白い輝きが溢れ出した。
『アーイ、スクリーム！』
元気良くそう叫ぶと同時、ベルトから手を離して大きく飛び上がった。
ベルトバックルの瞳の部分からは膨大な輝きが吹き出し、宙を舞うあきらの身体を包んでゆく。
やがて片足を突き出した跳び蹴りの姿勢に移行したあきらの身体は、まるで砲弾のように加速した。
それは、地上で身悶えしているアラクネの、包帯の簀巻きのような胴体部分を貫いていった。
『ーーーーーーーーッッ！』
苦悶の断末魔が響き、胴体部分に大穴をあけ仰け反ったアラクネが爆発、四散した。
その頭部から、包帯の隙間から覗いていた赤い瞳の眼球が飛び出す。

反対側のアスファルトを擦り焦がして着地したあきらは素早く身を翻すと、取り出したパラソルスパイクを一閃させてその眼球を打ち砕いた。

『よーしイイ仕事したよダーリン！』

勢いのまま一回転したあきらが、パラソルスパイクを肩に担いで気勢をあげた。

●　3　●

謎のパーカー姿の人物が、蜘蛛型の異形の眼球を砕く。
それで優の魂が肉体に還ることを遊馬は知っていた。
「わあああああああ!?」
だから、遊馬は腕の中で突如悲鳴をあげて暴れ出した優をすぐに押さえることができた。
「ゆっ、おい、ユウ！」
「あああああっ!?　わあああああああ！」
狂ったように腕を、脚を振り回す優を、遊馬は必死に抱き締めて抑える。
「ユウ！　おい！　私だ！　ユウ！」
「あああああっ!?　あわっ、あっ、あすっ、あすっ！」
「そうだ！　私だ！」
ようやく焦点が定まってきた優が、もたつく両手でどうにか自らを抱き締める遊馬の腕にすがりつく。
「あすっ、あすっ、ま、さん……！」
「ああ！　私だ！　大丈夫だ！」
唇を震わせる優の瞳を見つめ、しっかりとうなずく。
優は落ち着きを取り戻しつつあるが、顔色が青いのも、震えが収まらないのも、今や全身を濡らす雨のせいではないことを遊馬は知っている。
痛ましいことだが、こうして抱き締めて安心させてやるほかない。
優の背を撫でながら、未だ炎がくすぶる爆発跡に立つ謎の白いパーカー姿の人物を見遣る。
果たして、あれは何者なのか。
少なくとも、遊馬と同郷の者であろうが。
（――しかし――）
もしも、本当にそうであれば嬉しいが。
（――考えにくい）
有り得ない。

はずだ。
唇を噛み、道路の真ん中で燃え滓を傘でつついているパーカー姿を改めて睨み据える。
その時、景色に違和感を覚えて目を凝らした。
「――え――？」
いつの間にか、向かいのビルの隙間に、小柄な人影が現れていた。
青いパーカーを羽織り、ショートパンツにサイハイソックス。
丸い頭に、艶やかに黒いセミショートのストレート。前髪が真っ直ぐに切り揃えられている。
その下の、まん丸な瞳に好奇心を浮かべた少女。
先刻見かけたままの姿だった。
（良かった。逃げてくれていたか）
見間違いではなかった事と合わせて、深く安堵の息を吐く。
ともあれ、脅威は無くなったのだ。
これで安心して事情を聞ける。
遊馬は雨に遮られぬよう大声で呼びかけた。
「アクィラ！」
「おねえちゃん！」
同時にかぶさった声に、遊馬はぎょっとして懐を見下ろした。
――え？――
他に該当する人間が見当たらないこの状況で、優はいったい何を言い出すのだろう。
改めて優の顔を、視線を探るが、あろうことか優はアクィラを見つめて再び叫んだ。
「――明奈おねえちゃんっ！」
優は、はっきりと、同じ少女を見つめて優の姉の名を叫んでいた。
（――ユウ、何を――？）
不可解な状況に改めて周囲を見回すと、なぜか白いパーカー姿もこちらを向いていた。
目深に被ったフードの中の黒の無貌が、こちらを、優を見ているような気がする。

なにがそいつの注意を引いたのかは知らないが、遊馬はあまり気にせずに、優の背を支えながら立ち上がった。
身体を震わせながら、優もまたどうにか自らの足で立ち上がる。
とにかく状況を整理したい。優は恐らく、未だ激しく混乱しているのだ。
そう思って歩き出そうとしたところで、向かいの歩道にいる妹が、懐からなにやら丸いものをつまみ出した。
（……なに？）
それは眼球のようなもの。
しかも、それ自体が目玉のようでありながら、なぜか黒目の部分が半眼にでもしているかのように半円に描かれている。
「変身」
聞き覚えのある――遊馬の記憶にあるのと同じ声でそう言いながら、少女はその眼球を腹に巻いていたポーチの中に真上から放り込むと、ポーチの前面を叩くようにして納めた。
すると、ポーチの正面に描かれた目のような文様から一陣の青い風が吹き出した。
宙に舞い上がったそれは、深蒼色のパーカーだった。
所々に銀色の炎を思わせる装飾が付いており、全体に刺々しいシルエットで凶々しい印象を抱かせる。
「《ギザギザ》！」
続いて少女が叫び、ポーチの脇のフレームをぐいと引いて手放すと、飛び出したパーカーがまるで意志あるもののごとく少女の周囲で旋回し、背後から少女に被さった。
少女も自ら両腕を上げて袖に通し、着衣の微調整をするように軽く肩を揺すった。
装着するや否や、パーカーの内側から吹き出した白銀の霞が少女の身体を取り巻くと、やがてそれはぴったりとしたシルバーのボディスーツとなった。腕脚に部分的にブルーのジグザグラインが描かれている。
顔面までぴったりと覆い尽くした銀の無貌に、下から塗り変わるよ

うにして刺々しい角を二本生やした青い鬼のような形相が現れた。
やがて変化が完了したらしき少女――今や悪鬼と化したその姿から、余剰のエネルギーが放射され、降り注ぐ雨粒を同心円状に弾き飛ばした。
「っ!?」
こちらまで届いてきた圧力の余波と雨粒に、とっさに顔を覆った片手を下ろした時にはもう、悪鬼と化した少女は駆け出していた。
――道路に佇む、白のパーカー姿へと。
見れば、白のパーカー姿の方も、既に傘を剣のように持ち変えて、迎え討つ態勢で身構えていた。
「ま、待て！　いったいなにを」
意味の分からない変化と状況に完全に置き去りにされていた遊馬の叫びは届かない。
謎のパーカーを纏った両者は、互いに激突を始めてしまった。

遊馬が何を言ったのかなど気にしていなかった。
「明奈おねえちゃんっ！」
先ほどまでの異常な悪夢の衝撃も抜けきっていなかったが、それでも、夢にまで見た姉への呼びかけは止められなかった。
あれほど思い焦がれていたのに、その姉は青と銀の悪鬼へと姿を変じると、先ほど現れた白のパーカー姿へ襲いかかっていった。
不可思議なことが立て続けに起こり過ぎた。
もう一切の脈絡が理解できない。
銀の拳が、赤の傘が激突する危険な音が、そこに飛び込む気持ちを阻んでいる。
目まぐるしく位置を入れ替え続ける青と白。
とても割り込んで止めることなどできそうにない。
そもそも、どうして戦うのか。
このまま放っておいては、どちらかが一方を打ち倒してしまうのだろう。
そうなったら、姉は――

「……やだ……」
知らず、優の口からこぼれ出る叫び。
「いやだよ！　おねえちゃん！」
激突を繰り返す両者が、突如大爆発を起こした。

そいつが飛び出してきてからずっと、あきらは左手をベルトバックルの瞳に被せてふさいでいた。
その間、右手のパラソルスパイクのみで敵の攻撃を捌き続ける。
こいつと戦うのは初めてではないし、個体差はアラクネほど大きく違わない。
とは言え、今は普段と状況が違う。すぐ近くに生身の人間が二人いるのだ。
（さっさとどっか行ってくんないかなー）
先ほどの彼らの思わぬ反応を気にして出遅れてしまい、既に間合いを奪われてしまったため、彼らに逃走を促すことも、戦場を移すこともできそうにない。
（しょうがないなー）
だからあきらは、短期でこいつをしとめるべく機会を伺っていた。
幾度かの交錯の末、間合いを開いた敵がベルトのポーチの脇にあるフレームに手を添えた。
『《ギザギザ》！』
謎の呪文を叫び、フレームを引いて手放すと、ベルトの眼魂から膨大なエネルギーが溢れ出す。
『おっそい！』
だがそれは既に読んでいた。
敵が高出力攻撃に転じる隙を待っていたあきらは、今までずっとベルトに添えていた左手を離し、充填していたエネルギーを解放した。
これからエネルギーの集中を始める敵に、これを防げる道理はない。
『アーイ、スクリーム！』
叫び、その場で鋭く身を翻したあきらの、輝く右足が敵を貫き爆散

させた。

「……あ……」

「……」

優は、その光景を目の当たりにし、その場にへたり込んだ。

自分を支えていた遊馬の腕が脱力したことを訝しむ発想もない。

――数年ぶりに会えた姉が、謎の姿に変じ、何者かに襲いかかり、殺された――

いったい、何がどういう事なのか、さっぱり分からない。

せっかく会えたのに。

「……なんなの……なんで……」

もう力無く呻くことしかできない。

顔を叩く雨粒の冷たさも分からない。

「……さま」

傍らにいた遊馬が、一歩、二歩と歩みを進める。

「きっさまあああ!」

激高した遊馬が、光り輝く短剣を振りかざして白いパーカー姿に襲いかかっていった。

遊馬が持っているそれが何なのかも考えが及ばない。

先ほどからこの土砂降りの雨とともに繰り広げられた異常な光景の繰り返しに、優の精神はとっくに飽和していた。

この場で起きた異常事態の中で、唯一勝ち残った白のパーカー姿が今、遊馬の手の短剣を傘で弾き飛ばし、足下を蹴り払って遊馬を転倒させてしまった。

――これで遊馬も、自分も、殺されるしかない――

ふと、ぼんやりした頭でそう連想した。

ところが白のパーカー姿は、赤い傘をどこへともなく消し去ると、一瞬の閃光を迸らせてその姿を変え始めた。

フードに目を描いた白のパーカーだけが、浮かぶように離脱して消滅し、その下の黒のボディスーツが雲散霧消すると、その中からは、これまた小柄な少女が現れたのだ。

「……え……？」
それは、優にも見覚えのある姿だった。
先ほどまでの目が描かれたものとは違う、普通の衣料素材の白いパーカーを纏っており、ショートパンツに白のサイハイソックスを履いて。
目深に被ったフードの下は、お稲荷様のようなキツネのお面。
つい先刻訪れた大地探偵事務所の、奥のほうにいた謎の人物だった。
――なんで、あの人がこんなところに――
優の訝しむ疑問に答えるように、その人物は、ひょいとフードをはぐって背に下ろし、キツネ面を外して見せた。
「……え？」
もう、反射的に声を漏らすことしかできない。
キツネ面の下から現れたその顔は。
丸い頭に、艶やかに黒いセミショートのストレート。前髪が真っ直ぐに切り揃えられている。
その下の、好奇心をいっぱいに浮かべたまん丸な瞳。
数年間、ずっと夢に見るほど思い焦がれていた優の姉、倉木　明奈その人だった。
「……おねえちゃん……」
「……アクィラ……」
なぜか同時に謎の単語を呟いた遊馬と顔を見合わせる。
交錯する訝しむ気配。
恐らく遊馬も同じことを考えている。
――なぜ、この人をその名で呼ぶのか――
「あのさー」
混乱に次ぐ混乱に埋め尽くされた沈鬱な空気を、そんなあっけらかんとした声が軽快に打ち破った。
「あんたたちさー、死にたいの？　死にたいワケがないよねー？　死にたくないものふつー」
片眉を上げて、いかにも呆れたといったような風情で吐き捨てるよ

うに言う。
身体を打つ雨など無いもののごとく、軽薄な調子でしっしと手を振り。
「まともに戦えないんだからさー、とっとと逃げないとー。一応、衣織のお願いだから気をつけるけどー、あたしはそこまで親切じゃないよー？」
もう、いったい何を思えばいいのか。
そこに倒れ込んだままの遊馬も、目を丸くするばかりで言葉も出ない。
それでも、優は聞かずにはいられない。
「……おねえちゃんじゃ、ない、の……？」
「そう。それー」
ある意味、驚いたことに、その少女は優の疑問の声にきちんと反応を返してきた。
「あとそっちのお兄さんもー。さっき吹き飛ばしたアイツのこと指して、何か言ってたよねー？」
ひょいひょいと二人を指さして言う少女は、続いて自らの顔を指さし。
「んで、アレと同じ顔してるアタシは、きっと関係あると思うんだけどさー。ちょっとオハナシ聞かせてもらってもいいかなー？」
可愛らしく小首を傾げるその動作は、確かに記憶にある通りの姉の所作とまったく同じなのに。
その愛嬌たっぷりの笑顔には、知人に対する親しみが全く抜け落ちていた。
「……なん、で……」
思わず漏れた優の呟きを、その少女は自分の台詞への疑問と受け取ったようだった。
「あのねー。アタシも自分が誰だか、わっかんないんだよねー。だから自分のこと知りたくってー。ヒントにでもなればいいかなーって」
くるくると動き回る表情豊かな身振り手振りも記憶にあるものにそっくりなのに、優を見ても姉としての反応を示さないその少女に、

優はもう何も言葉が浮かばなかった。